モンスターはそこらにいるけど《狩人》が見当たりません(修正中)

眠たい兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンスターハンターの世界に生まれ変わった主人公が、《狩人》のいないその世界で《狩人》になるお話。

微勘違いや、ネタ的な意味でのＢＬを含みます。

目次

ポポを狩って帰ったらホモ扱いされた話 ―――― 1
村にやってきたギアノスを討伐したら幼馴染を抱く事になった話 ―――― 18
ドドブランゴの牙を拾って帰ったら幼馴染の姉さんを風呂に入れることになった話 ―――― 34
ドスファンゴを仕留めたら一晩枕になった話 ―――― 47
フルフルを討伐したら小さな抵抗を見た話 ―――― 64

ポポを狩って帰ったらホモ扱いされた話

野生の肉食獣と言えば、普通は捕食者側、狩人の立場を連想するのでは無かろうか。ただし、その肉食獣をモンスターと言えば立場は一転し、勇者であり某ゲームにおいてはそれこそ狩人に狩られる側へと立場になる。

「取り敢えずこんなもんだよな」

背負い式の鞘に片手剣を収納し、腰から小型の解体用ナイフを取り出す。仕留めたポポを解体しつつ狩場の近くに置いておいた荷車へと積み込む。

「旅に出ようかなぁ」

ここ数年で癖になってしまった独り言を零し、荷車を引いて村へと帰る。幾ら草食獣とはいえど、ポポは人間より遥かに巨大な体躯を誇る。とても重い。

「むむ?村の人達も、これだけでいいから手伝ってくれないかな」

このモンスターが大自然を闊歩(かっぽ)する世界に生を受けて十数年になるが、ここが辺境の地であるのが原因なのか、未だ《狩人(ハンター)》を見ることは出来ていない。

一応モンスターの襲来に備えて武具を扱う店はあれど、ただの鉄製武具等は飛竜は元より鳥竜種共にも効果は期待出来ない。精々が牽制だ。

「むぅ??アイルーとか！　メラルーとか！　手伝ってくれても良いのよ???」
タダでさえ重い荷車を引いて傾斜のきっつい山を越え、民家と畑、申し訳程度の柵くらいしかない村へと帰ってくる。
「ミコトが帰ってきたぞ！」
「成果は!?　怪我はしとらんか？」
「でっかい肉を持って帰って来たみたいだ」
「村長呼んでこい！」
近付くまでは静まり返っていた村が息を吹き返した様に活気に溢れる。大概問題児な俺だが、その問題児故にこの村では唯一の自称《狩人》だ。
「ただいま。出来ればこれ引っ張るの手伝ってくれ」
村の入口に荷車を止めると、先ずは子供が駆け寄って来て、次にガタイのいい親父共が群がるのである。何せ一週間ぶりの肉だ。
「ミコトよぉ、お前さんうちの婿にこねぇか？」
今更だが俺の名前はミコトだ。人を婿に勧誘するのは鍛冶屋のおっちゃんで、俺が狩りに出掛けるようになってからはある意味一番お世話になっている人だ。因みに彼の娘はまだ3歳程度であり、流石のロリコンも対象外だと言わざる得ない年齢である。
いや、俺はロリコンでは無いが。

「何歳下の嫁だよ、おっちゃん。早く本格的に解体して届けてやってくれ」
　願わくば乳が大きくなっていい感じに育ったらその時には嫁にください。
「おぉ、あとそれを受け取っとこう。手入れがいるだろう?」
　腰から片手剣を取り出して預けると、肩掛け型のポーチから採掘してきた鉱石をポポの毛皮で包んで持たせる。ちなみに俺は鉱石の見分けなんか出来ないので、そのへんは全て鍛冶屋に丸投げである。
「おぉ、悪いな。また新しいのが作れそうなら連絡するわ」
　こうして渡した鉱石は大部分が包丁や農作業用の鍬なんかになるのだが、一部は彼が加工の練習や実験に使っている。いずれは俺の武器となる予定だ。
　そうして一旦彼が工房に戻った所で村長と、村の娘達がやって来た。彼女達は村長の家で織物や食べ物の加工なんかをしているので、俺の帰還??ではなく肉の到着を聞いて急ぎやってきたのだろう。
「ミコト、此度も見事な肉じゃな。これでこの冬も越せようて」
「それは良かった。まぁ早く解体して加工する分は加工しちまってくれ。駄目になるって事は無いだろうが鳥が虎視眈々と狙ってるからな」
　そう言うと男連中がさっさと荷車を運び、村長と村娘達がそれに続く。何故村娘という呼び方なのか?　俺が好きだからである。なんか字面が良くない?

「お疲れ様、怪我してない？」
「お？　てっきり肉に付いてったかと思ったよ」
　一人残ったのは村長家の一番末の娘、リリである。一つしか歳が変わらない事もあり、狭い村では誰もがそこそこの付き合いだが一番仲がいいと言える相手だ。
「もう！　そんなに食意地張ってないよ？」
　とは言うがお前を残して全員が肉に付いて行っているのだ。実際俺が狩りに出るまで肉といえば年に数回の祭りで鶏を潰す程度、殆どのものは肉で腹を満たした経験など無かったらしいので肉に執着するのは当然ではあるのだが。
「悪い悪い、それでどうしたんだ？」
「それは??えっと??湯浴みするんでしょ？　手伝って??あげようかなって」
「おお、それは助かるが??大丈夫か？」
　何故かは知らんが顔は真っ赤で縮こまっている。薪なんかは割ってあるので力仕事では無いが、火を維持するのは存外に大変だ。
「だ、大丈夫よ??うん」
「んーまぁそれなら頼もうか、一人だと大変だしなぁ」
　かつて現代人としてスイッチ一つで毎日風呂に入れていた覚えのある俺は、どんなに大変でも狩りのあとには風呂に入る。それを聞きつけてかちびっ子や仕事終わりの

オッサンが押しかけてくることもたまにあるのが、湯船というのが如何に物珍しくも癖になるものかを物語っているだろう。

「うん??」

何故か俯いてモジモジしているリリの手を引いて薪を運び、昨晩から用意しておいた給水機の下で火を焚く。構造は簡単で、栓の付いた大きな鉄の器に水を溜めておき、加熱してから栓を抜いて湯船に流し込むだけだ。

「そう言えばさ、今度少し旅に??出ようと??どうした?」

ガタッ

狩り終わりに思った事を口にすると、リリはこの世の終わりの様な顔をして目に涙を溜める。かつて初めて俺が狩りに行った時もこんな感じだと思ったが、漂う悲壮感は断然こちらが上だ。

「なん??で???」

「っ!? いや、大きな村とかなら狩りに使える道具なんかもあるかなって??えと、どうしたの?」

目尻に溜まっていた涙が重力に従い落下するのを見て焦る俺は、手を掴んだまま泣き出しす幼馴染の頭を撫でる。

「いい村があったら、そっちに住むの?」

「え、いや、少しは滞在するかもしれんが帰ってくるつもりだ」
　きょとんとして固まった彼女を見るに、どうやら彼女は幼馴染が村を出ていってしまうと思ったらしい。前世での幼馴染が引っ越すのを聞いて泣き出すやつだろうか？
「というか、さっき何かにぶつけなかったか？　凄い音したぞ？」
　ガタッ
「え、いや、それは私じゃないよ？」
　その先を見ると村人数名が逃げていく後ろ姿が見えた、男の入浴なんか覗いても楽しくなかろうに??
「??男にも覗き魔って出てくるんだ」
「??」
「取り敢えず風呂に入ろうか、いい感じに沸いただろうし。なんなら先に入るか？」
「え？」「ん？」
「あ、ううん。いいよ、早く流したいでしょ」
　未だ返り血で所々赤く染まっている俺を見ての優しい言葉に、人をほっといて肉に群がる連中との暖かさの差を感じる。この娘やっぱり優しい（確信）
　装備をガチャガチャと外し、濡れない程度に床に撒くと、彼女が拾って洗い場に運んでくれる。感謝しつつ栓を抜き、桶でお湯を掬って頭から被る。

「ん〜！」

彼女が帰ってくる前に彼女がいると洗いにくい所から洗い、布で身体を擦るとお湯に浸かる。少しばかり熱すぎたのは水で調節するが、熱い方が好きなので万人向けとは言い難い温度だ。

「あ、もう入ってる」

「男が目の前で身体洗ってても困るだろ？」

「いや⁇それをやったげ⁇まぁうん」

一部聞き取れなかったが結論は困るなので無問題だろう。身体が温まるまで彼女と話し、温まったら彼女に後ろを向いてもらってズボンだけは装備する。

「ん、そんじゃ交替しようか」

「え？」「ん？」

「えーっと⁇何を？」

「入んねぇの？毎度やっといてなんだけどわりと準備大変だから俺一人入って終わりだと勿体無いんだけど⁇」

因みに家主である俺が男なので、女性は滅多に湯船に入りには来ない。来る時は前もって『アレ』を貸して欲しいと言われ、準備だけしておくと使用中は追い出される。俺が追い出されているのを見ると村の未婚連中が徒党を組んで覗きに来るが、既婚組と見

張りに大体撃退される。
「??あんまり見ないでね?」
「お、おう」
　普段なら振りかな？　とか考えるが少し可愛いとか思っちまった、不覚。ちょっと照れてるのが顔に出てると思うので後ろを向き、準備をするように伝える。
「ん、いいよ」
　振り返ると湯船に浸かって首だけ出した彼女、お湯を追加して湯加減を彼女に合わせる。
「どうだ?」
「あったかい??」
　ほぅ??とか聞こえてきそうなくらい気持ちよさそうな彼女を見て、久しぶりに髪を洗ってやろうと櫛と大桶を持ってくる。
「ほら、背中を」
「ふふ、ありがとう」
　櫛??と言っても木の板に刃物で深い切れ込みを入れてちょっと整えた程度のものを、彼女の長い髪に入れつつ流していく。
「ねぇ、外ってどんな感じなの?」

不意に尋ねる彼女の言う『外』とは、当然ながら村の外の事だ。基本的に一生の殆どを村で過ごすらしいこの村の住人は、外に出る事に極度の躊躇いを感じるらしい。よって、今では俺以外には外を見て回った事がある人間はいない。
「そうだな、結構沢山のモンスターがいるぞ。今日狩ってきた??俺の数倍はあるやつは近場に多いし、すばしっこい角の生えた小柄なのもいる」
「危なくないの?」
「危ないよ。けどそいつらは基本襲っては来ないし、時々突っ込んでくるのもいるけど大怪我した事はないだろ?」
『外』を知らない彼女は、今まで生きたモンスターを見た事が無い。ガウシカやポポなんかは飼い慣らせそうではあるが、ポポは兎も角ガウシカを捕まえるのは難しそうだし、ポポは下手すると潰されるくらいの重さと大きさをしているので引っ張って帰るのは無理だ。
「昔、あったよ。血塗れで帰ってきたの」
「??今だからいうけど、アレはいきなり現れたモンスターにびっくりして崖から落ちたのが原因」
「??なにそれ」
当時血塗れで帰った俺を見て大泣きされた身としては、まさか分不相応に肉食獣に挑

んでボロ負けして逃げ帰ったとは言えない。村長以外には言ってないのは、言えば必ず狩りに待ったがかかるからだ。

「でもまぁ、危ないのは本当だ。俺が狩りをする時の数倍早く狩りをする奴もいるし、大きな抜け殻を見た事もある」

「無理して挑んじゃダメだよ」

「??あぁ」

挑戦して負けた後です、なんて言えない。なんだかしんみりとした雰囲気を打開すべく、真っ直ぐになった髪に布を押し付けて水気を抜くと、頭を撫で、立ち上がる。

「もういいぞ、早く行かんと折角狩った肉が無く??あっ」

「うん、そうだ??ね??ッ!?　」

ゴッ!

恐らく人体が発してはいけない、以前大猪にどつかれた時以上に酷い音と共にぶっ飛ばされた。

「もう!」

顔を真っ赤にしてぷりぷりと怒る彼女の、一瞬垣間見えたマシュマロは、兼ねてよりの予想以上に大きく柔らかそうだった。このあと暫くの記憶はない。

「さて、報告を」

いつもとは段違いに真面目な空気の中、村長の言葉を聞いて前に出たのは覗組である村長の所の長女と鍛冶屋の妻だ。

「結果は失敗、いつも通りです」

失敗した作戦とは、自称《狩人》の青年、ミコトを村に括り付ける為の作戦である。奴に自覚があるかは兎も角、奴の時々見せる発想なんかはまさに革命的の一言であるし、奴が『外』に出て肉や薬草を持ち帰るようになってからは病気になる奴も減ったし死人も減っている。

「やはり、旅に出るとか言う考えは捨てさせられんか?」

今ここに集まっているのは、ミコトに近い立場にある者だ。村長家、俺（鍛冶屋）、その他ご近所が集まり『旅に出ようかなぁ』等と呟く奴の試みを阻止する為の会議だ。

「だがよぉ、村長。前までなら兎も角、今奴が不在になるのは不味いぜ?」

「分かっとる。万一旅先で他の村で同じ事をされたら、その村はミコトを手放さんだろうしの」

この村の『外』にも、村があるにはあるらしい。とはいっても交流はなく、あくまで御先祖が言うにはだ。

「何よりこの村でモンスターと戦えるだけの経験があるのはミコトだけだ。俺達も力任せに刃物を振るう程度は出来るだろうが??」

そう言うのはこの村の東側一帯で、掟破りを拘束する事を生業にしてきた一家の主だ。戦闘能力は他の村人よりあるはずだが、以前鳥竜種の襲撃を受けた時には成す術もなく逃げ惑うしか無かった。

「力任せではより力の強いモンスターには勝てぬ。不意を付けば傷付けるくらいは出来ようが??」

そもそも襲い来るモンスターの不意をつくのが殆ど不可能だ。モンスターの知覚は常人を遥かに凌駕するので、こちらが見つけた時にはあちらはもう走り寄っている。

「最早嫁を娶らせるくらいしか無いと思ったが??リリも存外にヘタレじゃからなぁ」

リリはこの村の女の中でもミコトとの距離も近く、リリがミコトに惚れているのは周知の事実だ。知らぬはミコトばかりである。

「奴も性欲が無いわけじゃないみたいなんがなぁ??」

小指を立てて上下に揺らしていると妻から鉄拳が降ってきた。

「ミコトはなんというか??その辺やけに慎重だからね。間違いなく一番強いのに威張っ

たりしないし、まぁそこがいい所なんだけど??」
　頬を赤らめながら言うのは奴に懸想する、リリ程では無いがやつと仲の良い娘だ。歳はミコトより幾つか上であり、奴には近所の優しい姉さんとしか思われていないのは自覚しているらしい。
「その辺はミコトだから、としか。元々落ち着いたやつだったから『外』を見に行くとか言い出した時は大騒ぎだったなぁ」
　ご近所の、親のいないミコトの面倒を昔から見ていた男の発言で、昔の奴を思い返す。??工房にやって来ては刃物を眺めて帰っていく変な奴だったな。
「まぁ今までちゃんと帰ってきてるんだ、案外奴なら何処に行こうとひょっこり帰ってくるだろうとは思うがな」
「だがなぁ??こう言っちゃ何だがミコトがこの村にいる事の利点ってそう無いだろ?そこがなぁ??家族でもいればいいんだが」
　因みに、既に何度か議論は行われており、その度に彼に家族がいればいいという結論に達している。だからリリや他の女をけしかけているのだが、奴は一向に食いつかないのだ。
「女で駄目なら男は???」
　それを口にしたのが誰だったのかは不明だ、有り得ないだろうし万一そうだとしたら

誰が行くのだとも思う。空気が死んだ。
「それじゃ!」
「「?!?!」」
それでいかれても困る、というのが全男の総意であり、また一部奴に懸想する女は絶望した顔をしている。
「さて??誰が仕掛けるかじゃが??」
未婚の男共、特に奴の同世代が一斉に後ずさる。村長が一人一人の顔を覗き込み、誰をけしかけるかを考え始めたその時、
「村長!ミコトが来ます!」
「全員片付け!」
一斉に会議室の様相を崩し、さも肉を解体していたかの様な姿勢をとる。実際、話し合いに参加していなかった連中は解体と仕分けを行っていたので多分誤魔化せる。
戸を叩く音が聞こえ、村長が入室を促すとリリと二人で入ってくる。奴の頬に真っ赤な椛印が付いているのはなんだろうか、いや犯人は分かりきってるんだが。
「どうも、肉の解体は進んでる?」
「あ、あぁ。進んでるぜ」
先程後ずさった男の一人が応えるが、顔にはありありと『お前は男が好きなのか?』と

書いてある。
「それは何より。手伝う事はあるか？」
親身に役に立ちたいと思ってるのは伝わるのだが、解体作業をしていた男はビクリと肩を震わせる。
「い、い、いや、大丈夫だ。あっちで休んでるといい」
「そうか？まぁこんだけいれば手数は足りるよな」
男が指差した先では男共が村長に何かを囁かれ、死んだ様な顔をしている。一緒に来たリリは姉等に連れていかれ、恐らくは椛印の理由と成果を聞こうとしているのだろう。成果は時間的に火を見るより明らかだが。
「さて、村長。俺はそいつの武器を手入れしてくるぞ、肉の処分先を決める時は呼んでくれや」
周りの男共から『お前だけ逃げるのか』なんて目線が突き刺さるが、幾ら何でも妻子持ちのゴツイ男が好みなんて事は無い筈だ。そもそも奴は普通に女好きだと俺は思う。
この後どうなるか、実に気になるが間違っても当事者にはなりたくないので後で妻にでも聞こうと決め、手を振って工房へと戻るのである。

よくよく考えたら村のほぼ全員が集まっているのだ、流石は有事の際の避難場所なだけあって大勢が集まるには十分の広さがある。
「??なぁ、お前ら?」
「お、おう。なんだ?」
腰を下ろした先で目が死んだ男共が挙動不審にしていたので声を掛けたのだが、これは何かあるなと察知する。
「何かあったのか?」
「??（隣の男を肘でつつく）」
「??・（爆散寸前のカクサンデメキンの様な顔をして耳を貸せと仕草をする）」
同世代で割と仲の良い筈な二人の不審な動きに戸惑いを覚えつつも、近寄って来た男の小声を聞き漏らさぬ様に耳を澄ませる。
『なぁ、お前男同士の恋愛ってどう思う?』
??は?
「??え、なにお前ら。仲の良いと思ってたけどお前達実はそう言う???」
男二人は安心した様な顔で首をブンブンと振り、清々しい笑顔で肩を叩いて村長の元へと向かっていく。去り際に一言。

「お前にそっちの趣味があったらどうしようかと思ったぜ??良かった」
「安心したぞ、うん」
この後俺が真剣に長旅を計画した。

村にやってきたギアノスを討伐したら幼馴染を抱く事になった話

ギアノスという生き物は、爬虫類の癖に知能が高い。いや、この世界の爬虫類は人間より賢かったりする事がままあるが。

ドスギアノスを中心に一つの群れを成し、連携して狩りを行う彼等は人間にとって脅威であり、獲物が獲れない日が続くと村を襲うこともあるのだとか。

「けどまぁ……【狩人】と【村人】じゃ勝手が違うよなぁ」

サシでの戦闘であれば、俺にとってギアノスは然程脅威にはなり得ない。かと言って積極的に狩る相手にするかと言われれば、群れを相手にするリスクは大きく、逆に食用にする事も出来ないので得るものは少ない。つまり、狙って狩る相手ではない。

クォッ！

腱を斬られ地に伏したギアノスが弱々しく鳴き、俺は片手剣を急所に突き立てる。

このギアノスは、群れからはぐれでもしたのか餌が取れなかったらしく、人の住む村があると見るや忍び込んできたらしい。手近な村人に襲いかかった瞬間に、丁度研ぎ直された片手剣を持った俺に遭遇してこの通りだが。

「助かったよ……首付いてるよな？」
　ギアノスが死んだのを確認すると襲われた村人、ジョーが近寄ってくる。他にも村人は居たのだが、ギアノスを確認した瞬間叫びながら逃げてしまった。
「付いてるよ。まずは村長に報告してくるかねぇ」
　斃れたギアノスの尻尾を掴んで引き摺るように村の集会所へ足を伸ばそうとすると、助けた村人は慌てて付いて来る。ギアノスの1匹くらいならあんたが普段持ってる鍬でも応戦できると思うんだが・・・
「なぁ、ミコト。お前こいつとも戦えるんだな・・・・・・」
「時々遭遇するからな。親玉がいたら逃げる事になるけど・・・・・・どうやら今回はこの1匹だけみたいだし」
　村の近くに潜んでますとかなら分かるが、あのドスギアノスが俺のいる村を襲うとは思えない。場合によるのだろうが、俺を見ても威嚇以上を仕掛けて来ることは滅多になく、戦闘に発展したのも最初の1回だけだ。
　その時は俺が胸や左腕を負傷し、奴は脚を斬られて片脚を引き摺っていた。要は痛み分けで終わったのだ、あちらとしてもこちらが不用意に近寄らない限り攻撃はしなさそうだし、それ以降こちらも近寄ろうとはしていない。
「親玉がいるのか？」

「大きいのが1匹な、頭が良いんだ」
　つい先程ギアノス相手に殺されかけたのを鮮明に思い出したのか、彼はブルルっと震えると辺りを見渡す。
「滅多に山を下りる事は無いと思うよ。留守の間に縄張りを奪われるのは困るだろうし」
　特にブランゴなんかに。
「コイツらから縄張りを奪う奴らなんかいるのか・・・・・・」
　群れを成すモンスターだけでもブランゴがいるし、洞窟内であればブヨブヨした奴なんかも居そうだ。俺は洞窟には入らないけど。
「単体でならもっと強いのが結構いるからな」
　集会所の扉を叩くと、どうやらモンスターでは無いと判断したのだろう。入室を促す声が聞こえる。
「おぉ、ミコト。ってジョー!?　無事だったのか」
　ジョーはてっきり死んだと思われていたらしい。その辺に【狩人】と【村人】の価値観の差を感じつつも、引き摺って来たギアノスを前に押し出すと空気が凍った。
「まぁ俺も死んだと思ったよ。実際後少しミコトが来るのが遅かったら・・・・・・」
　残念ながらジョーの話は誰も聞いていない。大人はギアノスの死骸と俺を見比べて

いるし、子供は空気を読んでか黙ってギアノスを見つめている。
やはり肉食系の生き物は危なくなければ子供にはカッコよく見えるのだろう。大人の警戒心とは逆に、その瞳には好奇心が宿っている。
「ミコト、ソレに仲間はおるか？」
「多分村にはいないんじゃないか？」
狩って帰る【狩人】に、村の中にモンスターが潜んでいるかどうかを確認する術は無い。それこそ異常の有無なら村人の目の方が優れていると思う。
「ふむ・・・・・・まぁ何はともあれ無事で良かった。済まないがミコト、確認に付いてきてもらってもええか？」
「勿論だ、その前に一旦防具を取りに行きたいがいいか？」
無いとは思うがドスギアノスがいたならば防具無しは現状無謀の極みだ。ギアノスなら兎も角、防具を着込んでなお痛み分けだった奴を相手に裸は確実に死ぬ。
まぁ防具と言っても動きを阻害しない程度に厚い布なのだが。
「それこそ当然じゃな、先ずはこの周辺から頼む。村の東、北、西、南の順番で代表とじゃな」
流石は村長と言うべきか、未だギアノスの死骸と睨めっこ中の者が多い中冷静に今するべき事を挙げる。

村長が鍛冶屋と取り調べの親父、村娘2名を指名すると確認に行くように指示する。
「そんじゃ行くか。頼りにしてんぜ」
鍛冶屋が笑って言うがその目は真剣そのもの、彼が槌を扱う時のものだ。まぁ武器無しでギアノスの群れのいる可能性がある所を見てこいと言われたら当然とも言える。
彼が先頭に立ち、俺がその左後ろを付いて行く。申し訳程度に武装した取り調べの親父が後ろを警戒しながら、3人に囲まれるような形で村娘2人が歩く。
「しかしよお、お前あのモンスターに勝てんだな・・・・・・・」
「サシならな？群れに挑む程無謀じゃないよ」
昔1度やったけど。
「もしもだ。もしもだぜ？今群れと遭遇したらどうだ？」
「なんとか時間稼ぎくらいは出来ると思う。でも防具があれば撃退もできないことはない・・・・・・かなぁ」
鍛冶屋の問いかけで強ばっていた3人の顔が解れるのが分かる。特に村娘2人はそれが顕著で、それまでは忙しなくキョロキョロしていたのが落ち着いて周りを見られる様になったようだ。
「ただ頼むから背中を向けて一目散にってのは止めてくれな。ことギアノス相手には殺して下さいって言ってるもんだ」

逃げる背中は襲わずにはいられない、という訳ではないだろうが、それでも確実に自分達より弱い事の証明にはなるだろう。
特にギアノス達は自称で素人とはいえ【狩人】を知っているので、逃げずに睨み付ける相手は警戒するだろう。
「どういう事？」
村娘の一人、関わった事はそう多くないが以前風呂を借りに来た時に話した子が質問する。
モンスターに襲われた→食い殺される、が当たり前らしいこの村の常識ならその問いも当然で、そもそもギアノスって何？である。現に鍛冶屋は「ギアノス・・・・・？」と呟いている。
「何も知らずにドキドキノコを食って倒れた奴らがいたとする。一見何の害もなさそうなキノコを食って倒れたんだ・・・・・・当然、そいつらはアオキノコだって警戒するようになるだろ？　もしかしたらこいつにも毒があるんじゃないかって具合にさ。この場合は俺がドキドキノコ」
「んで俺らはアオキノコか。・・・・・・そう言えばお前キノコ好きだよな」
「美味いじゃん？」
そんなこんなを話している東エリアを一周し、家で防具を身につけてから集会所へと

戻ってくる。
結局、ギアノスは見当たらなかったので解散となったのだが、各家々の確認に立ち会って欲しいと言われて非常に疲れた。初めて見た女の子の部屋は男部屋とは比べ物にならないくらい整っており、密かに尊敬の念を覚えた。

モンスターの襲来を聞いた村人の行動は早かった。皆近くにあった棒や鈍器だけを握りしめ、集会所へと集まったのだ。
齢３０を数えた連中の顔色は恐怖に染まっており、襲われたと言うジョーの家族は涙している。
「・・・・・・ミコトはまだか。彼奴ならもしかしたらと思ったが・・・・・・」
村長、祖父の言い分は尤もで、現状襲って来たモンスターに対抗出来る可能性があるのは幼馴染くらいだろう。
未だ集会所に来ていない幼馴染の万が一を思うと涙が溢れる。
「気休めにならんかもだが・・・・・・さっき奴に手入れの終わった武器を渡した。きっと大丈夫さ」

鍛冶屋のおじさんが見かねて声を掛けてくれる。彼が武器を持っている事に安心するが、襲来したモンスターが１０年と少し前にも村に現れたのと同種だと話しているのが聞こえ、〝もしかしたら〟の想像が更なる現実味を帯びる。

ズリッ・・・・・・ズリッ・・・・・・

何かを引き摺る音が聞こえ、村人が一斉に息を潜める。泣いていた者の口は近くの者が塞ぎ、親が子供を押さえ付ける。

集会所は針を落とす音すら響きそうな程静まり返る。

コンッ

扉を叩く音が聞こえ、皆が一息吐く。襲われたというジョーさんと彼以外は皆いるので、消去法で彼だと分かる。

「ミコトか、入れ」

祖父の声を聞くと、先ずはジョーさんが入り、次いでミコトが入ってくる。・・・・・・

あれ？

「おぉ、ミコト。ってジョー!?無事だったのか」

鍛冶屋のおじさんの声でジョーさんの家族は安堵から再び涙を流す。ミコトは苦笑すると左手を前に出し、血に濡れた何かを前に出す。

空気が死んだ。

・・・・・・倒したの？この短時間で？

「ミコト、ソレに仲間はおるか？」

最初に我に帰ったのは祖父だった。嘗ての襲来を思い出してか普段の『そやつ』が『ソレ』になっている。

「多分村にはいないんじゃないか？」

彼の言葉で空気が緩む。その後は祖父が組分けをして確認作業を行う様に指示する。

彼が出て行くと同時に皆の視線がジョーさんと祖父へと向く。

「で、ジョー。説明を」

「つってもそうねぇよ。農作業を終えて鍬を片そうと思ったらいきなり奴が出て来てよ」

「ミコトはどうじゃった？」

恐らく祖父が聞きたいのは彼が苦戦して倒したのか、楽々と倒したのかだろう。どちらにせよ彼が村の最高戦力なのは間違いないが、1匹とはいえ村を半壊させたモンスター相手に圧勝となると、本人に戻る気持ちがあっても旅になど出せない。

「不意打ちなのもあったんだろうが早かったぜ。上にそいつが乗ってたからよくは見れてねぇんだが、首に斬りつけて脚を斬って立てなくなったらグサリと・・・・・」

彼は無傷であったので予想は付いていたのだけど、やはり彼は相当強いのだ。動いて

るのは見た事は無いけど、彼の持って帰る茶色い獣はとても大きい。きっと凄く強いのだ。
「ふむ・・・・・・リリ！　何をぼさっとしておる！　とっとと既成事実を作ってしまえ！」
「はっはい！　・・・・・・はい？」
　反射的に返事をしてしまってから何を言われたかを理解する。あぁ・・・・・・また姉さん達に・・・・・・
「早くせんと他の女に取られるぞ。奴なら１０人くらい嫁がいても養えるだろうが・・・・・・ふむ、奴の子供も強いのかの」
「ダメです！」
「ならほれ、早くせい」
　反射的に答えてしまってからそれを自覚し顔が熱くなる。他の人達から生暖かい視線と、彼を狙う他の子達の強い視線が刺さる。
「うう・・・・・・」
　私だって彼の事は好きだから他の子に譲る気は無いが、未経験な私が言うのもなんだが彼は強敵すぎると思う。
　前も気が付いたら湯浴みをさせられていたし、それ以外にも私なりに頑張って誘って

みたり押してみたりはしたのだ。
コンッコンッ
再び扉が叩かれ、防具を装備した彼と同行した人達が帰ってきた。普段は決してそうは見えないのに、武器を手に防具を纏って立つ彼の姿は本当に強そうに見えるから不思議だ。
「北の組行くぞ」
北の人達を連れて彼は歩いていく。昔は大人しく、男の子なのに喧嘩の一つもしなかった彼はいつの間にあんなに強くなったのだろうか。
この後解散が言い渡されるまで、人前で閨での事を説明されたのは死ぬほど恥ずかしかった。

鍛冶屋のおっちゃんに何故か「頑張れよ」とか「男になれよ」と肩を叩かれ、やっと家に帰れたと思ったら今度は幼馴染が家にやってきた。
・・・・・・俺は男だよな？
「どうした？」

「あ、あの。一晩泊めて貰えませんか」
何故か敬語な上、顔を真っ赤にしている彼女に何があったのか。余程昼間の騒ぎが怖かったのか、それとも村長と喧嘩でもしたのか。
「・・・・・・お前なぁ。もう１５だぞ?」
「う、うん。分かってるよ」
「分かってるならいいんだけどさ」
いや、良くない。良くないがもう暗くなる時間に、ましてやギアノス騒ぎがあったばかりなのだ。そんな中彼女をほっぽり出すのも気が引けるし、なにやら覚悟を決めた顔をしているのできっと何を言っても帰らないだろう。
「あ、ご飯は任せて。作るよ」
「お、おう。頼む」
彼女が厨房に向かったのを確認すると、散らかりっぱなしの自室へと駆け込み片付ける。付けっぱなしだった防具を外し、念の為片手剣だけはすぐに取れる範囲に置いておく。
因みに俺の部屋に散乱しているのはすり鉢や空の瓶、名状し難い何かだ。もう大体何があったかは分かるだろう。
「出来たよ〜」

既に我が家の厨房で何が何処にあるかで困らない時点でどんな頻度でここに居るかが分かると言うものだ。通い妻かな？

「今行く！」

あ、違うこれ一人暮らしを始めた息子の家にちょくちょく顔を出して家事をする母親だ。

部屋を出るといい香りがしている。恐らくこれはキノコとポポ肉だ。

「おぉ、美味そう。完全に俺の好みを把握してるよなお前」

「何年の付き合いだと思ってるのよ。ほら、冷めないうちに」

「いただきます」

俺がいただきますと言うのを見届けてから彼女も席に着く。何故かは知らないが俺がそれをするまでは立っているのだ、彼女は。

一口分の大きさに切られたポポ肉をキノコと一緒に食らう。意外と歯応えのある肉と柔らかく厚いキノコの相性は最高だ。

「うん！美味い！」

「それはなにより。初めて食べた時にはびっくりしたけど肉って美味しいんだよね」

「流石にモンスターみたいに生で食うことはないけどな。ついでに言うと村長がポポノタン独占してるのがちと不満だが・・・・・・」

最初は食うという発想がなかったポポノタンだが、棄てられる所を差し押さえ、試しに村長と二人で焼いて食って以来、すっかり好物になってしまった村長が独占してしまっている。

まぁその分優先的にその他いい部位を貰えているのは有難いので直接文句は言わないが、それだけ優遇してもらっても惜しくなるくらいポポノタンはそら美味いのだ。

「ポポノタン？」

「何でもないさ。ほら、とっとと食って寝よう」

「――っ！」

「落ち着いて食えよ」

急に喉に詰まらせた彼女に湯冷ましを渡し、背中を摩ってやる。相変わらず彼女はそそっかしい。

「ふぅ・・・・・・・うん、頑張る」

いや、頑張って落ち着くな。

食べ終わった食器を下げ、水洗いして並べたら後は寝るだけだ。一応リリには寝間着替わりに俺の服を貸すつもりだが、もう彼女の服を常備していいんじゃないかとすら思い始めた。

「よし！んじゃ寝るか」

「あ、ちょっと！」
　前回同様に積んである藁に向かう俺の手を彼女が掴む。
「え、何さ」
「あの、ベッドで寝よう」
「いや、俺がそこで寝たらお前何処で寝るのよ」
「いいよ、一緒にその・・・・・・寝るから」
　不覚にも最後可愛いと思ったが、思ってしまったが故に一緒に寝てはダメな気がする。下半身的な理由で、より飾らずに言うと元気になりそう。
「・・・・・・いや、不味いでしょ。未婚の女が男と寝るのは」
　既婚だともっと不味いけど。
「いいから！ほら！大丈夫責任取らせるから！」
　グイグイと引っ張られてベッドへと連れ込まれる。勿論抵抗しようと思えば出来るのだが、これで彼女が俺のハイジベッドまで付いてくるのも問題だ、確実に風邪をひく。
　ベッドに連れ込まれた俺は無の境地を目指し、早々に寝ようとするのだが、いい体勢が見つからないのか隣で彼女がごそごそと動くので眠れない。
「ねぇ・・・・・・」
「ん？」

彼女は少しもじもじとして言った。

「お願いします。抱いて下さい」

俺は彼女の首の下に手を敷くと彼女の腰に手を回し、彼女が目を瞑ったのを確認する。そしてそのまま眠りに落ちた。

ドドブランゴの牙を拾って帰ったら幼馴染の姉さんを風呂に入れることになった話

ブランゴ、それは雪山に住むモンスターだ。砂漠なんかにもいた記憶はあるが、ブランゴ自体はさほど脅威では無い。

ただし、相手がドドブランゴとなると話は別だ。ギアノスとドスギアノスなんか比べ物にならない、何食ってそこまで大きくなったのか是非教えて欲しい。

グオオオオオオ！

その咆哮は同族ですら耳を塞ぎ、ブランゴとは比べ物にならないその剛腕から繰り出される一撃は飛龍にすら匹敵する。

早い話が今の俺には即死攻撃だ。ドスギアノスも相手にするのを嫌がり群れを引き連れて撤退し、俺もどさくさに紛れて逃げる。

ドッドッドッ

チラリと背後を振り返るとそこに迫るは立派な体躯のブランゴ、理由は不明だが酷く興奮している。

横っ飛びで人一人がぎりぎり通れるくらいの空洞へと逃げ込む。何とかして俺を攻

撃しようと　手を伸ばすが、残念ながらその立派な身体は穴にはちと大き過ぎる。
「なんでこんなに怒ってるのか・・・・・・」
　同族に手をかけた覚えはなく、縄張りには侵入したがここまで荒ぶっているのは初めてだ。縄張り意識は強い種族の筈だが逃げる相手をここまで執拗に追い掛けることも無かった。
　ガリガリと山を削ってでも俺を追い詰めようとするドドブランゴから距離を取ろうと、奥へ奥へと逃げ込む。
「奴諦めてくれるかなぁ」
　交尾の時期でも無いはずなので本当に原因不明なのだが、ずっとこの袋小路の入口を削られるのは勘弁だ。
　ドゴッ
　轟音と共に怒り狂うドドブランゴが吹き飛ぶ、そして轟音の原因を見て納得した。
「なるほど、同種同士の縄張り争いだったか・・・・・・」
　恐らくドスギアノスはこれを知っていたから一切粘らずに手を引いたのだろう、無理して縄張りを死守せずとも同種同士で潰し合ってくれると。
　相変わらずモンスター離れした悪知恵に呆れるが、その悪知恵の対象が俺でないなら構わない。寧ろ死体の一部でも持って帰れれば御の字だ。

ベキッゴキッ
グシャッゴリッ
おおよそ生き物から出ていい音とは思えない音が響き、叫び声や何かを投げつける音が聞こえる。背後ではブランゴ達が茶色いモノを投げつけあっている。
ベチャッ
ベチッ
「・・・・・・そう言えばドドブランゴって縄張りにはアレを埋めるんだった」
つまりお互いのボスのそれを掘り返しては嫌がらせの為に敵陣営のブランゴに投げつけているのだろう。
なんて下品なヤツらだ。
グオオオオオオ！
ガァァァァァァ！
怪獣決戦ももう最終段階なのか、お互いが叫び声を上げど突き合う。血潮が舞い、お互いの毛皮が剥げようとも殴り合うその姿は河原で殴り合う高校生を連想させるが、周りはそれどころではない被害を被っている。
地面には亀裂が入り、山壁は抉れ、ブランゴ達は茶色く染まっているのだ。人間目線では兎も角、ブランゴ達は真面目にやっているのだろう、多分。

バキッ

何かが折れる音がして、片方のドドブランゴが崩れ落ちる。当然ながら容赦なく首元に噛み付き、震える脚に鞭打って壁に叩き付ける。

恐らくは息絶えたのを確認したのだろう、やや満足そうに死体を見下ろすドドブランゴは、その実力においてこの付近では頂点だろう。

「新参が勝ったか・・・・・・」

怪獣決戦を制したのは新参の若いドドブランゴ、これで勝ったのが歳をとった老獪なドドブランゴなら話が違ったのだろうが、ここからの展開はもう決まっていた。

ふらふらと定まらない足取りながら古い群れを睨み付けると、ボスを失ったブランゴ達は逃げて行く。勝者たるドドブランゴの背後に向かって。

クォッ！クォッ！

ドドブランゴの咆哮とは違った、どこか狡猾さを感じさせる鳴き声が響く。ドドブランゴとその群れは音のする方を向いて低く唸る、現れたのはあのドスギアノスだ。

たった1匹で現れたドスギアノスに、ドドブランゴは鼻を鳴らす。傷付いても1匹のドスギアノスなら相手取れると思ったのだろう。先程死んだドドブランゴならこの場で撤退しただろうが、若い彼はあのドスギアノスを知らなかった。

「うん、今のうちだ」

狭い通路をくぐり抜けると、死んだドドブランゴの折れた牙を抱えて走る。
若いドドブランゴは一瞬こちらを見たが逃げる相手より対峙する敵の相手をするべきだと判断したのだろう、再び睨み付ける。
クォッ！
一際大きく鳴き声をあげると、幾つもの軽快な足音が駆け抜ける。何処に潜ませていたのかは不明だが、ドドブランゴを囲うように現れた１００を超える数のギアノスは彼の群れだ。
中には彼以外のドスギアノスも含まれており、元々は幾つもの群れだったものが纏まっているのだと分かる。
「・・・・・・ギアノスってこんなに脅威になるモンスターなんだな」
この後の展開は確認していないが、まぁ結果は火を見るより明らかだろう。幾つもの山を縄張りに持つドスギアノスは人より遥かに頭が良く、個ではなく群において近隣最強だろう。
村に牙を持って帰った所、鍛冶屋のおっちゃんがこれと氷結晶で武器を作ってくれるとの事なので今回はあのドスギアノスに感謝してもいいかもしれない。今度会ったら生肉でも置いていってやろう。

雪獅子、ドドブランゴは山の神としても扱われるため、実物を知らずとも偶像化されたそれは子供でも知っている。

その象徴たる牙を妹の幼馴染が持ち帰ったと言うので、村では大騒ぎだ。尤も神として扱われるとは言っても荒ぶる系の神様なので、いないに越したことは無い。

「で、リリ。幼馴染として仲が良いのは分かってるからさ、男女としてはどうなのよ」

《狩人》を自称する、黒髪碧眼の青年は規格外である。御伽噺に登場する勇者様なんかが火を噴く龍を討ち取ったり、清らかな乙女が喧嘩をする龍を祈りで鎮めたりするものがあるが、彼を見ていると御伽噺も本当にあった話に思えてしまうから不思議だ。

彼に歳の近い女の子は大体彼の強さに惹かれるし、ならばさぞ男の子には嫉まれるだろうと思いきや男の子も彼に憧れている。

「姉さん、これ以上何をすれば・・・・・・」

「んー最終段階はドキドキノコだけど・・・・・・」

姉として妹の恋は応援してやりたいのだが、もう少し若ければと思ってしまうので邪魔しない程度に揶揄うのは止められない。

祖父なんかは立場上なんとか彼がこの村を出るようなことを回避しようと必死になり、鍛冶屋のおじ様は彼の影響でメキメキとその実力を上げていると聞く。
「ドキドキノコは危ないよ・・・・・・昏睡させてとかそういう・・・・・・？」
「いや、媚薬効果に期待」
「・・・・・・ドキドキノコ以外で何かないかな」
何が起こるか分からないドキドキノコだが、私が聞いたことがあるのは腹痛、催眠、神経毒、滋養強壮、傷の治癒、気が付いたら家に居た、そして媚薬効果だ。
既に２０を越して立派な行き遅れな私だが、上手く引けたら彼のとこに嫁に行けないかなぁなんて思う。いや、流石に妹の次くらい、２号さんでいい。
「薬剤師のとこにでも行ってみたら？案外あるかもよ？」
彼が採集をする様になってから素材は豊富なのだ、今までは余程で無いと使われなかった雪山草は風邪でも使われる様になり、薬草なんかも転んだ子供の治療にすら使われる。
媚薬なんかもあるかも・・・・・・と言った話をすると、妹は勿論聞き耳を立てていたらしい子も薬剤師の元へと走っていく。
「元気ねぇ」
若いっていいなぁなんて思いながらふらふらと歩いていると、件の少年が半裸で水を

運んでいた。また湯浴みの為の水汲みだろうか。
湯浴みも画期的な発想だと思う。準備は非常に大変そうだが、何より気持ち良い。その大変そうな準備も嫌な顔一つせずやってくれるのも、彼が人気な理由なのかもしれない。
「こんにちは、それは湯浴み用？」
「ん？あ、ミゥ姉さん。そうですよ」
こちらを振り返る彼は汗なのか水なのかで濡れ鼠の様だが、その身体は記憶にあるものと比べてかなり引き締まっている。記憶にあるのはまだ彼が満足に走り回る事も出来なかった頃のものだから当然だが、男の子とはこういうものなのだろうか。
「やっぱり大変そうねぇ。手伝える事ある？」
「大丈夫ですよ。沸いたら入ってきますか？」
「いいの？」
「これだけの水を一人で使うのは勿体無いですからね」
そう言えば彼が私を「姉ちゃん」から「姉さん」と呼ぶようになったのはいつからだろうか。少し寂しく感じるが、男の子が女性に敬語で話すのは大概相手を女として見ている事が多いのでそれもありかと思う。
流石に手伝いもせずに湯浴みをさせて貰うのは忍びないので、彼の仕事量には微々た

るものだが小さな器で水を汲んで運ぶのを手伝う。
「そう言えば山神様の牙を持ち帰ったんだって?」
「山神様・・・・・・あぁ、ドドブランゴですか。縄張り争いに遭遇しまして、多分本体の方はギアノスに食われたでしょうね」
　山神様はドドブランゴと言うらしい、多分彼が勝手に付けたのだろうが呼びやすくて妙なセンスを感じる。
「そのギアノスはドドブランゴより強いの?」
「いえ、ギアノスのボスなんですけど、そいつが無茶苦茶頭がいいんです。一対一で戦ったらドドブランゴの方が強いんですけど・・・・・・」
「なるほど、上手いこと罠に掛けたのね」
　そうして暫く彼の見てきたモンスターについて話したが、昔から何かを知ったり、考えたりするのが好きな私にとって彼の話は新鮮でとても好ましい。
「さて、そろそろいいかな。少し待っててください、沸かしますから」
　そう言うと彼は薪を組んで火を起こし、水を入れた大きな器を熱していく。鍛冶屋のおじ様と合同制作らしいこの装置だが、何処から知識を得れば考え付くのかさっぱりだ。
　湯気が立つと彼は塞き止めていた栓を抜き、暖かい湯を流し込む。

「はい、どうぞ。俺は見張りでもしときますね」
「んー？いや、別にいいよ。流石に女に飢えた獣の様な目で見られるのは困るけどさ」
少し揶揄うつもりであったし、行き遅れな私は７つも下の子に裸を見られたくらいどうってことは無い。多分これが行き遅れの原因ではあるんだろうけど。
それでも律儀に後ろを向いたくれた彼に、湯に浸かってから「いいよ」と声を掛ける。
「ミゥ姉さんも若い女性でしょうに・・・・・・」
「いや、嬉しいけどもう２０過ぎの行き遅れよ・・・・・・？」
今更だが１５くらいがこの村での結婚適齢期であり、１８までに大半が嫁に行く。２０過ぎても嫁を取らない男はいれど、２０過ぎて独身貫く女はそうそういない。他に見たことないし。
「まだ２０でしょ？ミゥ姉さん時々見せるジジ臭い独り言以外は若々しいから余裕だと思うんだけど・・・・・・」
「へぇ・・・・・・ミコトは私みたいなのが嫁に来てもいいの？」
ちょっとした意地悪のつもりだった。彼は別に悪くないが、私だって独身でいる事にはコンプレックスを抱えているのだ、少しくらい許して欲しい。
「え、割と歓迎ですよ？」
「え？」

さも当然の様に歓迎されて目が点になる。お互い後ろを向いているが、私の顔はきっと赤いのだろう。

これって妹に先んじて彼を狙っていいのかな・・・・・・・

「ミコト！いる？」

そんな事を考えていると外から妹の声が聞こえた。もしや本当に貰ってきてしまったのだろうか。

「リリ？どうしたんだ？」

「あぁ、良かった。ちょっとこれ・・・・・・・を・・・・・・・」

「あー・・・・・・」

妹の顔が私の方を向いて固まり、私とミコトを交互に見て口をぱくぱくとする。

「姉さん!?なんでいるの!?」

「いやーさっき水汲みをしてるミコトを見つけてね。少しだけ手伝って・・・・・・・」

「いや、ミコト・・・・・・まさか姉さんに手を出して無いよね？」

「何もしてないし見てすらないよ」

その通りなので頷いておく。結局彼は妹によって追い出され、私は事の顛末を詳しく説明させられることとなった。

幼馴染に自宅を追い出されてしまった。

まぁ自分の姉が幼馴染とはいえ男の前で普通に風呂に入ってたら男を追い出すのは自然だが、もしかして俺って幼馴染の姉にいかがわしい事をしたとか思われる・・・・・？

「いや、ねぇよな。うん」

「いや、何の話だよ」

追い出された俺は鍛冶屋の工房へとお邪魔しており、丁度息抜きの途中だったらしいおっちゃんと一緒だ。

「で、ミコトよ。リリとはどうなんだ？」

「どうって？」

「そりゃ、前同じベッドで一晩を共にしたんだろ？」

「まぁそうだな？」

「抱いたか？」

「抱きしめて寝たな」

おっちゃんが頭を抱えて蹲った。何故か勝った気分と負けた気分が同時に押し寄せてきた。
「お前さ・・・・・男だろ?男見せようぜ?」
「男だよ、どっからどう見ても男だろうが」
おっちゃんは頬を叩くと工房の奥へと走っていき、新しく作ったという氷結晶とドドブランゴの牙がメインの一振を持ってくる。
「おら、取り敢えず形にはなってるだろ?次はなんか土産を持ってこいよ、ガキか嫁でもいいぞ」
「おう、期待しといてくれ。それじゃちょっと振ってくる」
半年ぶりの新しい装備だ、心が躍る。早く狩りに行きたい気持ちと、ちゃんとチェックは済ませろという理性が火花を散らして睨み合う。
「取り敢えずガウシカくらいからかな」
足取り軽く自宅に戻り、何故か風呂に姉妹で入っていた幼馴染に試作品の桶を投げ付けられたのは俺が悪いのだろうか?

ドスファンゴを仕留めたら一晩枕になった話

《狩人》として活動する中で、俺が嫌いなモノが3つ存在する。大事なのは嫌いなモノという事で、決して強敵やまだ見ぬ災害クラスのモンスターを指しているわけでは無い。

自室のベッドで横になっている俺は、今日一日の災難っぷりを思い出して深い溜息を吐く。

「ミコト～、ご飯できたよ」

声が掛けられるが、残念ながら返事が出来る状態に無い。擦れた声なら出るが、どう頑張ってもウチの台所には届かないのは間違いない。

パタパタと湯気の立つ皿を持って現れた幼馴染は、未だ感覚の無い手足をピクピクと動かす俺を見て心配そうな顔をする。

「だ、いじょ・・・・・・ぶ」

「本当？」

頷く事で返事を返す。現状言葉で説明できていない為過剰な心配をさせてしまっているが、これは単なる『痺れ状態』だ。モンスターの前で陥らなければマッサージや時

間経過で回復可能な、村では脅威度の少ない状態である。
余談だが俺とて最初はマッサージを頼もうと思ったのだ。痺れた舌のせいで上手く発音できず、鉞だったり匙だったりをもってこられて諦めざるをえなかったのだが。
「原因が分かれば良いんだけど・・・・・・」
彼女の呟きに、俺は今日の災難を振り返る。
事態は数時間前に遡る。

ギアノスの襲来以降、夜警や村の中央での待機を言い渡される事が増えた俺は、久しぶりの狩りに心を弾ませながら村を出た。狩りとは言っても鍛冶屋に頼まれた鉱物の採集と、余裕があればケルビやガウシカを狙っていく程度のものだ。
暫く雪山を登ると、いつもの採取ポイントで袋を広げる。ピッケル等は持っていない為、鍛冶屋から貰った中古品の槌と鉄に穴を開けるための釘を使う。
「この作業は嫌いではないんだが・・・・・・」

黙々と作業すればよいなら寧ろ好きなのだが、この辺りには気配を消すのが上手いヤツも生息しているので目視での警戒が怠れない。加えて今日は採取を行う際の天敵、ランゴスタの数がやけに多い。

ランゴスタに食われるなんて事は無いだろうが、威嚇のつもりなのか背を見せれば麻痺を狙ってくるのだ。個人的に大嫌いなやつその1だ。

ブウンブブ・・・・・・

羽音が一定の大きさを刻み始めたと思ったら即座に剣を抜き、背面に叩きつける。

キュイッ！

「これ近くに女王がいるんじゃないか・・・・・・？」

短い断末魔を上げ、浮力を生み出す為の羽を折られたランゴスタは地に落ちる。その頭部を踏みつけてトドメを刺し、周囲に散らばる羽虫共の死骸に溜息を吐く。

「もう帰るか」

直前まで掘り進めていた鉱石を強引に叩き落とし、それを袋に詰めると崖から放り投げる。袋は当然重力に従って帰り道付近の横道に落下する。

こんな雑な扱いで良いのかとも思うだろうが、この世界の鉱石は一定の条件下以外では非常に硬く人の力では傷付けることすら困難だ。鍛冶屋なんかは代々その加工方法を研究しているらしく、今回の採取もそれに使われるのだろう。

「ん？」

ふとした拍子に不穏な気配を感じ取る。幾ら自称だろうとも《狩人》を名乗るならばこれを気のせいとは流さない。即座に剣を抜き、耳を澄ませる。

ドッドッドッドッド

幸か不幸か相手は微塵も隠す気が無いらしく、己の持つ武器を前面に押し出して突っ込んでくる。あの体躯とシルエットは間違うはずもない、皆の嫌われ者、通称〝ドス生肉〟ことドスファンゴだ。

当然、コイツも俺の大嫌いな相手である。

「右牙が短い・・・・・・珍しいな」

多くのブルファンゴは左利きだ。よって回避する際は左側に己を置く事を意識するのだが、今回突進してきた相手は右利きの様だ。

ブォッ！

低く唸るような鳴き声と共に右牙を突き出してくる。

牙の軌道を余裕を持って回避するとヤツが向きを変える前に後ろ足を斬りつける。武器を変えてからは初めての遭遇なのだが、前と比べると段違いに切れ味が上がっている。

ブンッ！

腱を斬りつけられてなお直撃は勘弁願いたい攻撃を下がる事で回避、流石に突進は使えないだろうが、この巨体が足を止めて牙を振るうのも十分に脅威である。絶対に前世でのヒグマパンチ並みの威力がある。

「これで別の大型と一緒に相手してるとか??まさにモンスター（な）ハンターだよなぁ」

生憎これ以上の大型を相手取るのは多分今は無理だろう。クック先生くらいが今の俺の実力だと思う、雪山暮らしなのでそれこそ旅をしないと出会う事は無いだろうが。

初手で機動力を奪っている為常に側面をキープするように動いているのだが、それでも牙が掠る度、足が触れる度にこちらの傷は増えて行く。当然一方的にやられ続けているわけではなく、腱や腹を狙って攻撃も行っている。

ブオォォォ！

右前足の腱を捉えると、自重を支えきれなくなったのか崩れ落ちる。それでも大暴れし、その最後の抵抗は引っかかれば人間なんぞ軽々と吹っ飛ばすだけの力がある。蹄に蹴られぬよう、横腹から深々と剣を突き刺す。

「ふぅ・・・・・にしても立派な牙だっ!?」

流石のドスも力尽きたと判断し、それでも十分な距離を取って向かい合う。それが不味かった。

バフンッ！

盛大なクシャミ、鼬の最後っ屁とばかりに放たれたその一撃は軽々と俺を吹き飛ばし、数メートル程の飛距離を叩き出す。それを最後に息絶えたらしいが、吹き飛ばされた方角が少しでもずれていたら俺も息絶えていたかも知れない。

崖下に落ちなかったことに安堵しつつ、物言わぬドス生肉を転がすようになだらかな斜面へと運び、一息に突き落とす。俺はヤツの通った後の大雑把に除雪された道を通り、下山の後に荷車に鉱石と獲物を乗せる。

「ポポより重いぞ」

最近気付いた事だが、俺の筋力は恐らく村では相当な部類に入る。前世の感覚だと中学生くらいの年齢であり、体格もそれ相応だから手押し相撲なんかをすると大人には負けるのだが、倒木を運ぶ時なんかはその軽さに驚いたくらいだ。だが多分それは狩りで付いた筋肉でなく、その後、獲物を運ぶ時に付いた筋肉なのだと思う。

最初の頃にポポどころかガウシカすら四苦八苦して運んでいたのが懐かしい、そしてそれに対応できてる自分、というかこの世界の人間はやはり成長上限とかが外されている気がする。

「リリも大分成長してるしなぁ」

何処とは言わないが柔らかそうな部分とか??うん、やめとこう。風呂場での一件では本人にしこたま殴られたし、思い出したら殺されかねない。けどまぁ美人になってきた

よなぁ。

昔は親無しで引っ込みがちだと思われていた俺を色々引っ張り回す腕白娘だったが、今では時々素が出る程度の落ち着きのある美少女だ。俺が《狩人》なんていういつ死ぬか分からない生き方をしていなかったなら、きっと彼女に告白でもしているのではなかろうか。俺の感性的にプロポーズやらは少なくとも2～3年は後だろうけど。

「さてっと、おーい！」

幼馴染の成長を振り返りながら重い荷車を引き、村の入り口に着くと見張りに声を掛ける。山道を上ってくる俺を見ていたらしく、あっさりと門（といってもブルファンゴの突進で多分砕け散る）を開けると入れてくれる。

「おかえり、って大分派手にやられたな。今相方が村長呼びに言ってるからちょっと待ってろよ」

「おう、つってもまぁ飲むもん飲めばすぐ治る」

「酒か？」

「もっと苦いヤツだよ」

こちらでは親の許しさえあれば子供でも酒を飲む事があるが、体調を崩す事があるのは知っている為滅多に子供が口にすることは無い。そもそも酒は祭りの席で少量振舞われる程度であり、滅多に口にする機会が無いので大人がまだ早いと言って飲ませない

と言う面も大きい。
当然、苦いヤツはグレートではなく太陽草とアオキノコから出来るものである。
「っと、来たな」
「お前本当に耳がいいな」
後ろからの一撃で命を刈り取って来そうな奴等が多いので、小さい音にも敏感に反応するようになる。時々雪崩なんかも起こるので、聞き逃しは本気で生命の危機に直結する。
「ほぉ・・・・・・また随分と大きいのを仕留めたの」
「村長・・・・・・普通最初は怪我の心配とかじゃないか?」
「ワシがせずとも他がするじゃろ」
爺に心配されるのが最高というならするぞ、と言われれば肩を竦めるしかない。今日は早く帰って鼻水と一緒に吹き飛ばされたり鉱物採集したりで汚れた身体を何とかしたい、特にドス生肉の鼻水。
「おぉ、採ってきてくれたか!」
鍛冶屋の嬉しそうな声を聞いて、持ち帰った鉱石に当たりが入っていてくれた事に満足する。正直鉱石の見分けは得意で無いし、正確な名前も不明なので鍛冶屋に何を頼まれているのかも実は不確かなのだ。

「おう、目当てのものがあったようで何よりだ」
村でも採掘は出来るのだが、環境が変わると鉱石の質や種類も変わるのだとか。余程特徴的なの以外は皆目分からないが、良い刃物が出来るなら幾らでも採取してくるつもりだ。
「ミコト！怪我してるじゃない！」
「あ、あぁ。然程深くないから大丈夫だ、少し休めば血も戻るし」
そう言っていい加減怪我を治すべく緑色の液体を呷り、一息で飲み干す。一瞬、飲みなれないが過去に感じた事のある味がして、咄嗟に吐き出そうとするが飲み込んでしまったものはそう簡単には出てこない。
「げっ・・・・・・・あ・・・・・・・」
身体がピクリと痙攣し、ひっくり返る。意識はあるのに手足が動かず、感覚も非常に鈍い。
「ミコト!?」
「おい！」
「大丈夫か!?」
周りの心配する声が聞こえるが、久しぶりにやらかした。これは間違いなく、俺の最も嫌うモノ、『ドキドキノコ』の症状の一つである。

この後鍛冶屋に姫抱きにされ、俺の世話を任されたらしいリリが世話をしてくれることとなった。

と、言うのが今日の出来事だ。鉱石採取をすれば大量発生したランゴスタ、初めて狩猟成功したドスファンゴには鼻水と共に吹き飛ばされ、最後にはアオキノコそっくりに擬態したドキドキノコ産の回復薬でノックダウンだ。

「食べられる？」

軽く頷くと、えらく楽しそうに匙を口に突っ込んでくる。未だ口の中が痺れていた為大分苦労したものの、食べているうちに段々と痺れが抜けてゆく。

「ふぅ・・・・・・・やっと普通に話せる」

「痺れ消しの薬が効いて良かった。それで何が原因なの？」

「・・・・・・・ドキドキノコ」

ポカンとした顔をしたリリ、概ね予想通りの反応だ。村に生えるドキドキノコは原則赤く如何にもな外見をしており、定期的に駆除されるので子供でも見分けられるのだ。

「・・・・・・今度見分け方を教えようか？」
「村に生えてるヤツなら見分けられる。外のキノコに擬態してたんだよ」
「ふーん・・・・・・・」
なんだか余り信用していない顔をされているが、本当なので信じて欲しい。
「本当だからな？」
体の痺れが抜けると、ドキドキノコによって治せず仕舞の傷がズキズキと痛む。狩りの最中や運搬中はアドレナリンなんかがドバドバ出ているのか気にならないのだが、一旦村に帰るとやっぱり痛いものは痛いのだ。
起き上がり、棚から回復薬を取り出す。
「待って！それ本当に大丈夫？」
その心配はもっともだが、どれ程苦くとも今回は味を確認してから飲むつもりだ。少量口に入れ、思わず顔を顰めてしまう苦さを確認してから一気に飲む。
「うへぇ・・・・・・」
自分の中を何かが這い回る感覚の後、急速に傷口が塞がる。残った不快感を力を込める事で打ち消すと、大きく伸びをして彼女に笑いかける。
「んーー！完全回復！」
「って事はもう気を使う必要無いって事でいい？」

安心した表情を浮かべた彼女に「おう！」と返す。
「なら、ちょっとそこに座って」
「え？」
「座って！」
逆らえない雰囲気に圧されてベッドに座ると、頭に衝撃が走る。
「無理しちゃダメって言った」
「ん・・・・・・？」
「狩り、無理して挑んじゃダメって言った」
ポカンとした俺の様子に、以前風呂で約束した内容を思い出す。確かに『無理して挑んじゃダメだよ』と言われた記憶がある、しかし今回は然程無理はしていない筈だ。現に、途中へまはしたが勝利している。
「あぁ。だが今回は無理したわけじゃないぞ？」
「あんなに血だらけだったのに？」
確かに怪我はした、牙に掠った時や吹き飛ばされた時に負った傷だ。しかしかといってもその程度であり、痛みはすれど死ぬ事もなければ休めばちゃんと回復する程度だ。
そこまで思った所で、俺が《狩人》として活動を始めた頃の一件を思い出す。俺は《狩人》を自称して外で活動こそしているが、大型モンスターに挑む事は無く挑むとしても

強くてギアノス程度だ。よって滅多な事では怪我をすることが無い。
「・・・・・・怖かったか？」
無言で頷く彼女の瞳からは涙が溢れ、手は震えている。
「あの時は3日、寝込んでたか」
「4日、その後も暫く動けなかった」
そこで完全に涙腺が決壊したらしい彼女は、声を上げながら俺の胸に頭を預ける。そのままゆっくりと後ろに倒れ、彼女の体重を全て受け持つ。
「あの時は村に帰ってすぐに倒れたな」
「死んじゃうかと思った。あの時も、今日も」
「悪かった」
やはり当時の記憶が忘れられなくなっているらしい。血塗れで帰って来て、その直後に倒れたのがそれを刺激してしまったのだろう。
「ねえ、死なないって約束して」
「・・・・・・悪い。けど、生きて帰る努力はする」
ここで「死なない」と言うのは簡単だ。しかし《狩人》はそれを約束できないものだろうし、その約束はきっとしてはいけないものだと思う。万一があった時、残った彼女が俺の帰りを待ち続けてしまうのは想像に難くない。

「・・・・・・無理は、ダメ」
「無理はしないよ」
「約束」
「あぁ、約束だ」
　頭を撫で、背中を摩る。暫くすると泣き疲れたのだろう、静かになったと思ったら規則正しい寝息が聞こえて来た。気付けば外も夕暮れ時をとうに越しており、街灯等ない村の住人は眠りにつく時間だ。
「ごめんな、リリ」
　ポポの皮から作った掛け布団を掛けると、手を伸ばし部屋を照らしていた二つの火皿に蓋を下ろした。

ミコトが倒れた後の村は、静まり返っていた。見張りは通常の倍の数居るが、可能な限り灯りを出さず息を潜めるのだ。ミコトが外での活動を始める前はこれに近かったが、今はそれ以上だ。

「やはり・・・・・・ミコトには居てもらわねばな」

「そうですね、毎晩これでは・・・・・・皆もちません」

ワシの言葉に、娘のミウが返す。僅かな灯りを点けた我家には、夜警の順番を待つものが緊張した顔で並んでいる。万一今日襲撃があれば、それを伝えるのは夜警の者の断末魔になるのだろうから。

「やっぱり誰か若いのを外に行かせるべきじゃないか?」

鍛冶屋の提案に、若い連中が顔を青くする。実際鍛冶屋の提案は悪くないし、可能ならそれを推奨したい所でもある。幾つかの問題がある為実行に移せていないが、既に何度も話題には上がっているのだ。

「ぢゃが・・・・・・誰が行く?あのミコトですら怪我を負う外の世界に」

奴が持ち帰った獲物は、外で得る物の価値を教えてくれた。彼が獲物を持ち帰れば村は満たされ、モンスターの襲撃を恐れて細々と暮らす生活から目を逸らさせてくれた。

「今回の獲物を見て、自分なら生きて帰れるなんて思う奴はいねぇよ!」

「おい、静かにしろ」

「アイツも護衛しながらは無理だって言ってたし・・・・・・・」
　同時に外の生き物が如何に強大か、人間と〝モンスター〟の差を思い知らされる。たった数匹、人間とそう変わらない大きさのモンスターが迷い込んだだけで半数が殺されたのは大して昔の話ではない。
「けどよぉ、ミコトが狩りに行く度に村中がこれだ。怪我なんてしていたら数日続く、とてもじゃ無いが現状ではミコトに頼りすぎだ」
「だからこそ、奴が子でも作ってくれれば良いのだが・・・・・・・」
「村長がこうビシッと・・・・・・無理かぁ」
　基本的に村では村長の決定は絶対だ。それは村長の意見は村の総意であるとされるからであり、村から出ればモンスターが跋扈する世界が広がっているからである。村からの追放は死を意味し、死と天秤に掛けて勝つもの等そうそう無い。
　だがミコトは例外だ、奴は村の外でも生きていける。ミコトは非凡な人間であるが、その人格は驕らず他人に合わせる事を知る好感の持てるものだ。だから村長として命令すれば大体の事は素直に聞くだろうとは予想される、ただ彼が常々言っている『旅をしてみたい』や『他の村に行ってみたい』と言う言葉がその行動に待ったを掛ける。
「娘共の事も悪からず思っているだろうに・・・・・まさかモンスターに発情とかか？」
「「!?」」

「いや、好意の対象を殺してから持ち帰るとかねぇから」
無いか・・・・・・まぁ無いだろうしあってもらっては困る。
「村長として命令は出来ねぇなら・・・・・・他の親共はどうか。娘をさり気なく薦めたりは？」
「見合いだと見るや露骨に避けるぞ、アイツ」
これも何度か話に上がっており、失敗の報告しか聞けていない。これを足枷になる家庭を持ちたくないと言う意思表示と取るか、それとも別の理由からかは不明だ。
「やはり・・・・・・弟子でも取らす他あるまいか」
ちらりと若い衆を見るが、千切れんばかりに首を振る様子を見て溜息を吐く。真っ当な反応の筈なのに情け無いと感じてしまうのは、既にミコトに毒されているからだろう。
静かな会議は人を代え、日が昇り回復したミコトが顔を出すまで続いたのである。

フルフルを討伐したら小さな抵抗を見た話

俺の生まれ育った村において、同年代の子供の数は極端に少ない。また老人の数も同様で、この世界を認識するようになってからずっと気になっていた事だ。

俺の親は俺を産んですぐに死んだ、と聞いている。当時ギアノスによる大きな襲撃があったと聞いていたので、多分多くがその時の犠牲になったのだろうとは思っていた。親を殺された事について思う事が無いわけでは無かったが、この世界で奴らが生きる為には〝仕方がなかった〟と思う事にしていた。

「で、俺はそう思ってたんだけどさ。どう考えてもお前は〝討伐〟対象なんだわ」

ブヨブヨとしたゴム質の皮膚を持つ種族の、同族と比べて遥かによく〝肥えた〟個体の屍を足蹴に言う。

通常個体より戦闘能力において遥かに劣っていたその個体の屍の周りにあるのは、ご丁寧に首だけとなった白骨の山だ。いくつか腐臭を放っているモノもあり、少し前まで笑っていた少年のものも見つけた。

【狩人】に憧れて、武器の振り方なんかを聞いてきた初めての子供だった。つい数日前には風呂にもいれてやった。

「モンスター殺しまくってる俺が言うのもなんだけどさ、お前もうちょっと良い趣味持ってりゃ良かったよ」

今回の狩りの目的は行方不明の原因の究明、珍しく村長直々に報酬を提示された上での依頼であった。

ここ1ヶ月で5人の子供が目を離した隙に消え、帰ってくる事が無かった。村中総出で探し回って見つからなかった為犯人をモンスターと断定、俺が出ることとなった。

「お前明らかにさ、〝愉しんでただろ〟」

言わば特殊個体だったのだ、このフルフルは。恐らくは何らかの切っ掛けに人間の味をしめ、時間をかけて嬲り殺す事に楽しみを見出したのだ。

そして最後には首を引き千切り、身体は喰らったのだろう。楽な獲物を、子供を狙って襲う事を覚えたそいつを狩るのは、ギアノスを狩ることより危険が少なかった。

「お前置いといて連れて帰ってやりたい奴はいるんだけど、これで終わりとは言いきれないからな」

地面に落ちていた木製の短刀を拾い、ズルリズルリと小さく肥えたそいつを引き摺っていく。その足取りはやけに重かった。

村の半数が集まり、集会が行われた。今日の議題は『行方不明者の捜索とその結果』だ。

「また見つからなんだか・・・・・・これはモンスターによるものだと断定するが、良いな？」

祖父・・・・・・村長が確認を求めたのは幼馴染ではなく、行方不明の男の子の両親へだ。この件がモンスターによるものだと認める事、それは被害者がもう死んだものとして扱うと言う事なのだから。

「・・・・・・・分かりました」

長い沈黙の末、掠れるような声で応えたのは男の子の父親だ。それを聞くと、今度は幼馴染へと視線を移す。

「ミコト、依頼をする。報酬は可能な限り考慮しよう、元凶を討伐して欲しい」

「まだ元凶が分からないけど、了解だ。行方不明になった場所と状況を教えてくれ」

二つ返事で了承する幼馴染に、過去数回の事件の詳しい情報の説明が入る。その後集会は解散し、家族のいるものは家族の元へと急ぐ。

家族のいないものや犠牲者の家族、家が村の中央にある者はと言うと、ミコトの周り

に集まっている。これは保身の為というのもあるが、精神的に余裕のある者が手伝った方が良いという考えもあっての行動だ。
「なぁミコト、お前さん元凶は分からんと言ってたろ？本当か？」
「本当に分からない、そもそも誰も悲鳴を聞いてないんだろ？」
鍛冶屋のおじさんの質問にミコトが答える。その通り、目を離したのはほんの少しの間なのだ。子供達がミコトの真似をして木製の武器で遊んでいて、1人がトイレに行ったきり戻らなかったと言うのが事件の発端である。
「即死って事じゃねぇの？」
「血の跡も無かったんだよな？」
私も一撃で殺されたのだと思っていたが、血の跡が見つかっていないのが確かに奇妙だ。それ故すぐにモンスターの仕業とはされず、村を捜索する事となったのだ。
となると・・・・・・
「子供が自発的に外に出たってこと？でも出入口には見張りが・・・・・・いたわよね？」
姉さんがジロリとジョーさんを睨む。
「当たり前だ！ここ暫くで5人だぜ？そもそも子供にはあの扉は開けられねぇし、外からは閂を落とせねぇ」
サボりの常習犯だったジョーさんだが、ミコトに救われてからはそれなりに真面目に

当番をこなしているし、以前でもこの状況でサボる程愚かでもなかっただろう。
「なら空ってこと？」
「子供とはいえ人間を一瞬で攫えるやつか・・・・・・どれも相当に大型だな。なら誰か見てるんじゃないか？」
　私の意見もハズレだったらしい。
「強いて言うなら全部村の外れで起きてて、５件中４件が村の西側で起きてるって事か」
「だが１件は東側だろ？それに西側はモンスターも通れねぇような崖しかねぇぞ？」
　西側の最端はきりたった崖が天然の壁となっており、それ故に何処よりも安全と思われてきた場所だ。
「これで原因がモンスターじゃくて転落でした、とかはねぇよな？」
「４人も？それにだとしたら東側での原因はなんなのよ」
「そりゃアレだ・・・・・・やっぱねぇか」
　ジョーさん、おじさん、ミゥ姉さんがあれこれ言っているが、どれもピンとくるものがない。
「ミコトの知らないモンスターって事は考えられない？」
「無いとは言わないけど・・・・・・それだと倒し方を探す所からなんだよ。解決出来ないと意味が無いからな」

「だよね・・・・・もしかしたら崖を登り降り出来て悲鳴を上げさせることなく人を攫うモンスターかぁ」

考えるだに恐ろしいモンスターだ。ミコトも想像してしまったのか難しい顔のまま固まっている。

「・・・・・ヤツなら、出来るか。あの警戒心の塊みたいなケルビにすら気付かれなかったヤツなら・・・・・・」

「あん?どうしたよミコト」

「今から崖を見に行く、もしかしたら痕跡が残ってるかも」

そう言って走って行くミコト。追いかけようかとも思ったけど、万一モンスターに遭遇したら完全に足でまといだ。

息を切らせて戻ってきた彼は、勢いそのままにドキドキノコをカバンに詰め込んで〝外〟に出ていってしまった。

ミコトのヤツが何かを載せて帰ってきた。その報せを聞くとすぐに人が集まった。
「・・・・・・・のぉミコト、ソレはなんぢゃ？」
ソレとは足と翼を持った巨大なミミズの様な何かである。それが力を失ってそこにいるのだ。
「フルフル、隠密能力に長けていて雷を使って狩りをするモンスターだよ。こいつにとっては人間が狩りの対象だったらしい」
「ふむ・・・・・・了解した。他に報告する事はあるかの？」
儂の問いかけに対して少し考えると、後で報告に向かうと返してきた。
「では報酬は何が良い」
「ソレを使った武器が欲しい、詳しくは鍛冶屋と相談になるか？」
「そうじゃな、あまり食えそうにも無いし食料にはなるまい。好きに使うといいじゃろ」
幸いな事に食料の備蓄は十分にあるし、そもそも人間を食べてきたモンスターを食すのは抵抗がある。ギアノスとやらも同様だ。
ふと、鍛冶屋や薬師が興味深げに観察する傍らで、息子を失った両親とそこの娘が死体を睨み付けているのが目に入った。
「ふむ・・・・・・ミコト、それに鍛冶屋。武器を作るのにそいつの頭は必要か？」
「いや、牙もねぇし使い道は無いだろう。ミコトはなんかあるか？」

「いや、無い。そもそも武器にするために持ち帰ったわけでも無いからな」
　どうやらコレを見越しての事だったらしい、恨みをぶつける対象として、持ち帰ったのだろう。死体に鞭打つ行為ではあるが、遺族が発散も出来ずに自暴自棄になられるよりは良いだろう。
「感謝しよう」
「・・・・・・あん？ミコト、お前あれ程言ったのに剣の柄で殴ったな？刃と違ってそこまで強くねぇんだって」
　鍛冶屋が死体の側頭部を抑えて言う、確かにそこが小さく凹んで変色している。
「いや、それは俺じゃない。多分コレだ」
　ミコトが出したのは小さな木製の短刀、子供達がミコトの真似をして投げたり振ったりしているものだ。
「・・・・・・・まさか、あの悪ガキがやったのか」
「モンスター同士ならこんな傷にはならないよ、どっかで頭を打った可能性は否定出来ないけど。でも最期までコレ、手放さなかったみたいだし」
　この場を離れようとしていた者も足をとめ、モンスターの頭の殴打痕と木製の短刀を交互に見る。友達を亡くした子供達は自分用のそれを握りしめ、涙を流している。
「あの、ミコト・・・・・・・それを受け取っても、いいか？」

目を真っ赤にしながらも子供の親が遺品を受け取りに出てきて、ミコトは黙ってそれを差し出す。

所々で嗚咽があがる中、1人また1人と場を去ってゆく。儂がその場に背を向け、自宅に引き上げるとすぐにミコトが追ってきた。

「報告の件なんだが、いいか?」

「構わん、お前達は下がっておれ」

家族を下がらせると、2人だけの空間が出来上がる。言い出しにくそうにしているミコトに対し、こちらから切り出す。

「ミコトよ、あの場では納得して見せたが奴が元凶だと言うには少しばかり、根拠が弱いと思うのぢゃが?」

「間違いない、報告はその件なんだ。奴は巣で仕留めたんだが・・・・・・首だけが並んでたんだよ、ずらりと」

「・・・・・・それは、ヤツにとっての戦利品か?」

我々人間も同じ様な事をする。ミコトがモンスターを狩って帰れば食肉としてだけでなく、それを素材に家具や飾りにも使うのだ。

「いや、時間をかけて楽しんでたんだ。恐らく死にかけたら最後に首を引きちぎってたんだろう、フルフルは本来一度飲み込んだらそれっきりだからな」

「了解した、それで報告は終わりか？」
「いや、もう1つある。そこに並んでた首なんだが・・・・・・多分この村の人間以外のものもあったんだ、つまり・・・・・・」
それを聞いて頭が真っ白になった、村長としての態度を崩さなかったのは奇跡と言えよう。旅に出たがっていたミコトが、ついに他の村の手掛かりを見つけてしまったのだから。
当然ながら、その後村の主要人物らに非常呼集を掛けた。